

半夜はんや
(良寛りょうかん)

回首五十有餘年
人間是非一夢中
山房五月黄梅雨
半夜蕭蕭灑虛窓

首こうべを
回めぐらせば
五十ごじゅう
有ゆう
余年よねん

解説 夜半、山房のわびしい窓に降りそそぐ五月雨の音を聞きつつ
五十余年の生涯を回顧し、感慨を述べたもの。

人間じんかんの
是非ぜひは
一夢いちむの
中うち

語釈 ※半夜Ⅱまよなか。夜半。※首回Ⅱ振り返って見ること。

※是非Ⅱ是と非。正しいことと正しくないこと。※山房Ⅱ山の庵。

五合庵をさす。※黄梅雨Ⅱ五月雨に同じ。さみだれのこと。※蕭蕭

Ⅱものさびしいこと。雨や木の葉の降りそそぎ舞い散るさま。

※虚窓Ⅱ誰もおらず、がらんとした部屋。

山房さんぼう
五月ごがつ
黄梅こうばいの
雨あめ

半夜はんや
蕭蕭しょうしょうとして
虚窓きょそうに
灑そそぐ

通釈 五十余年の生涯を振り返って見ると、人間社会のことは、自

分ひとりのことに限らず、是も非も、すべて夢の中のことのように
しか感じられない。夜中にただ一人この山の庵に坐して物思いに
耽ふけっていると、五月雨がさびしく虚窓に降り注ぐ。